おちほ

第5号
1980年10月31日発行
社会福祉法人椎の木会
落穂寮
発行者 増田正司

つらい時もあった30年

落穂寮長　増田正司

去る五月二日に、落穂寮創立三十周年記念式典を盛大に挙行することができ、沢山の方々からの祝福を受け、感謝に満ち溢れた一日でした。

過ぎ去った三十年は、あっと言う間のできごとのように思われますが、その日日は平安ばかりではなく波風に揺れに揺れて、肝を冷やすようなことも再々経験させられました。

夏、午睡の時間に抜け出して、瀬田川べりで水遊びをしていたつやちゃんが、足を滑らせ川にはまって流され、アップアップしていたところを偶然魚釣りにきていた人に間一髪助けられたことがあります。連れてこられた時はびっくり仰天して、しばらくものが言えませんでした。

秋も深まって山々が紅葉に染まりだしたある日の午後、山歩きの散歩の最後尾を歩いていた英一君が、道を間違えて行方不明になった。秋の陽は落ちるのが早く、手分けして探し出した頃には日もとっぷり暮れて、懐中電燈の灯りで山のガサ原に隠れた物を探し出すことは難しい。悪いことに英一君は名前を呼んでも返事をしない子で、必死に彼を呼びかける声が空しく闇に消えていきました。

近所の民家の人たちや、学園の先生方が四方八方に散って、山からの降り口から、山狩りを何回も試みてくれましたが、彼を発見することができませんでした。夜露と晩秋の冷えこみが探索の人たちを一層疲れさせ、殺気立った焦ら立ちから山で不測な事故が起きかねないと思われ、その夜の捜索を打ち切る事にしました。最悪の事態が何処かで起きている、それをどうすることもできない、たゞ覚悟を決めて待つしかありません。

一晩中まんじりともせず夜明けを待ちました。

英一君は、捜索の人たちが何回も通った、山道の脇のガサ原の茂みの中にしゃがみ込んでいるところを発見されました。隣家の犬が異様に吠えるので、探してみたらそこに彼が坐ってました。寮から500mぐらいの所でした。

子どもたちを生命ぐるみ預っているから、先づ第一番に生命の安全のことが絶えず頭にこびりついています。前述の二人の場合は幸いに無事救出されましたが、受難は思いもかけない時に起こります。預っている子どもの大方は物を言うことができません。できたとしても身の囲わりの極く些細な生活上のできごとに限られ、自分や他人や、周囲に起きたことを正確に説明することは大変難しく、大方が不可能と言えます。身辺に重大な危機状態が迫っていても、これを伝達できない時に、傍に添いている職員がもしその異変に気がつかなければ、最悪の事態に陥ち入ってしまいます。又外見からは判断できない生理的な急変が察知できない場合も同じです。

お医者様は、我々が預っている子どもたちの診察に困られます。痛いかと聞けば何処も痛いと言うし、痛くないかと聞けば、前言をひるがえして何処も痛くないと言います。

石部に移ってから、たて続けに悲しいできごとが起きました。

佳代ちゃん、満ちゃん、ひとみちゃんの三人が亡くなりました。佳代ちゃんや満ちゃんの身体がだんだん冷たくなっていくのが、抱えている手に感じられ、心の中で「生き返ってくれ、生き返ってくれ」と祈り続けるしかない非力の自分が情けなく、神様や仏様の力が欲しいと念ずるのでした。

出先から戻ってひとみちゃんの死を知らされ、胸が刺されて苦しかった。遺体を囲んで静かに冥福を祈る母親や親類の人、寮の職員をかきわけて彼女の安らかな眠りの顔にふれ、心の中で泣きました。霊前にお経を唱えてひたすら安心をこい願いました。

子どもたちの一挙手、一投足に喜び悲しみ、泣かされての職員の生活は親御さんの慈愛にもまさって、子どもたちの心に豊かなものをもたらしていくものと考えます。

「施設のしおり」を読んで

わが右手への思い

山下陽一

右手

右手の指
右手の手くび
右うで
ゆびがだんだん動く
手くびがうごく
うでが動く
ふつうの人より
おそいが、
ゆっくりゆっくり
動く
今までの
ど力がみのる
これからも
右手　がんばれよ

右の詩は、さきほど滋賀県児童収容施設協議会から発行された「施設のしおり」の中にあり、滋賀整肢園の西村礼子さんの詩です。西村さんは中学一年生でしょう。「しおり」の中に数多く収められている作品の中で、この詩を読んだとき、私は心の中からじわじわと何かがにじみ出てくるような、そんな感動に胸を打たれました。

私は彼女が何の原因で右手が自由でなくなったのかは知りませんが、その手を動かせるために一生懸命に訓練している様子がひしひしと伝わってきます。そして今まで数年間練習を積んできたその成果が次第にあらわれてきて、「ゆっくり、ゆっくり」と動くようになってきたのでしょう。この詩にはその努力の様子がにじみ出ています。

これからも
右手　がんばれよ

この詩は最後に、自分のままならない手に激励を贈って終っています。このことばは何と人の心を感動させるではありませんか。

私のからだはこれといった障害は何もありません。だから右手が自由に動き、からだの部分がそれぞれ自由になるのに何の感動もなく過していました。だけどそれはたいへんな間違いなんだということを西村さんの詩は教えてくれました。彼女が自分のからだをかたち作っている部分（右手）への限りない愛着を示しているのに比較して、あまりにも無関心に生活しているのではないか、又手が自由に動く、足が思ったように動く、これらのことにあまりに無頓着に日々を暮しているのではないかと思えるのです。けれども何かの原因でからだのどこかが不自由になったり、使えなくなったりしたとき、私達ははじめてその大切さ、尊さが身にしみて感じるらしい。

私も今は若いけれども、五〇才六〇才と歳をとるとともに目も耳もからだも次第に、そして確実に不自由になって行くでしょう。そんなとき、からだが自由に動くということの大切さをより身近かに感じるでしょう。遠い昔の自分の生活をふりかえってどんな思いにかられることでしょうか。

私は彼女の詩を読んでさまざまに感じさせられました。ひとつは障害のある人達との共感ということがどれだけ困難であるかということです。私達は体験した後のみに不自由さを痛切に感じるだけですから。

そしてもう一つは、自分を形作っている部分一つひとつに感謝の念が欠けているなということを思い知らされました。

私達は自分のからだについ

談餘録

秋とはいっても、昼の暑さはきびしい毎日ですが、美しく晴れた空には、いわし雲が浮ぶ今日此の頃。皆様方いかがお過しでしょうか。

この機関紙の発行が大変遅くなってしまいました。本来ならば夏休み前には、発行できる予定でした。しかし初めてのことで、原稿の依頼、収集に手間取り、そこへ運動会が重なり、忙がしさの山積みになってしまい、発行が大変遅くなって、今日になってしまいました。運動会も十月五日、日曜日に予定され、毎日、朝早くから練習を重ね、本番を待つ楽しみが、子供達にあふれている様子です。

皆様方のお手許に、この機関紙が届く頃には、もうすっかり、燈火親しむの候になっていることでしょう。五号目は大変手間とってしまいましたが、六号、七号と経験を積み重ね、予定通りに、又、内容も充実していく様に、編集委員一同、力をあわせて頑張りますので、ご愛読下さいますよう、お願い致します。

（谷口）

近況報告

おちほ あれこれ

新しい人の紹介

L.L サイズでがんばってます！

西墻里美

「君ねえ、その身体で行動に支障はないのかね？」

「は、はい。昔からこれで、これがベストだと思います。」

「特技……、バレーボール？

はーん。」

「は、はい。中学・高校と続けました。」

「しかし、立派だねェ。」

「は、はい……。」

片隅に小さな数字で156cm・70kgと書かれた履歴書を真中に、こんな深刻な会話が交わされたのが、寒さも身にしみた一月三〇日。それから内定通知・実習・初出勤と、小さな不安を大きな胸に抱きつつ、気がつけば、もう夏も終わりに近づいている。

どうやらこの職場には、重量制限なるものはないらしく、そう気付くと、食事がおいしくて、楽しくて仕方がない。休みの日でも、食堂に集った子どもたちのにぎやかな声を聞くと、とんで行きたくなる。子どもへの指導の空回りからくる落ちこみもなんのその、食欲不振どころか、一層、食欲が湧いてくるようだ。

私にこの食欲をもたらす原因はその「ヤケ食い」ともいえる状態もさることながら、何と言っても落穂寮のすばらしい自然環境である。田舎育ちの私には、さして、珍しくもない山々ではあるが、その田舎育ちの素直な消化器の持ち主である私の新陳代謝を一層うながすのだから、やはり良い環境なのだ。そして、その中で行なわれる早朝の〝マラソン〟や〝柔軟体操〟等々。これは、私にとって、少々辛い部分の日課の一つではあるのだが、とにかくこれらが、それは、それは、みごとに噛み合って、一段と私は立派になってしまうのである。

ある夏の午後、お昼寝をしていたイタズラ坊主のツョシ君が、急に私の腕をつかんでこう言った。

「よーし、ボクも大人になって、こんなに大きくなるぞー。」

うれしくて、涙の出そうなそのひと言。そして私は心の中でこうつぶやいた。

「ヨーシ。先生だって、LLサイズで大きく、大きくがんばるぞー……」と。

異常気象の夏もおわり、今は楽しい食欲の秋、夏の日焼けもさめることなく真黒な顔で増々元気にがんばっている。

福祉点描　子らの思い

山崎映子

私の決心

子供たちと共に

山口陸美

私が施設で、働きたいと思ったのは今から四年前のことです。

知人から「読んで見ませんか」となにげなくすすめられた、「いのちの讃歌」「ヘレンケラーわたしの生涯」などを手にしたのがそもそもでした。私は、それらの本を読んで、障害者の闘い、そして現実の厳しさを、あまりにも知らなすぎたことを痛感したと同時に、どんな障害者でも十分に教育が可能であることを学びました。私はその時ほのかに、アンサリバン女史のような先生になりたいなんて大それた考えを持つようになりました。そして二年前ユートピアンに終わらないで、何かをしよう、少しでも障害者の人達の役に立つ人間になろうと思い、施設にはいる決心をしました。

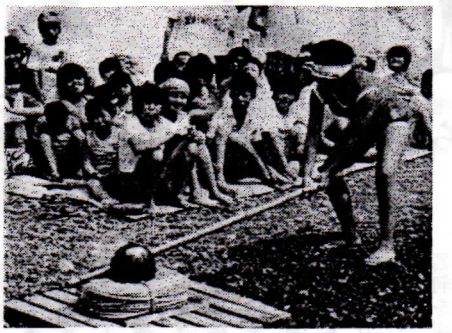
そして今月の四月より実際施設で働いてみて、また、子供達の姿をみて、常に私達は進歩、そして新たな創造力が必要だと思いました。

最近になって、子供にとって、私の存在はどんなものかな？　私にとって子供の存在は大きく、彼らから毎日教えられているんだなあと思うようになりました。

まだ子供達に振りまわされ、血相を変え、走りまわっているダメ保母ですが、まあ気長にがんばっていこうと思っています。

キャンプの記憶

――小浜市田烏町の浜辺――



ヤッタ！　かずみちゃんうまい！

日本海に向けて走るバスの中。子供達の会話がとび交う。

「あっ、琵琶湖や。」「琵琶湖。」

「違うで、海やんか。」

「へえー、ほんま、海や。」

「海や！」

薄陽にてらされて、蒼々と輝く日本海。ここは福井県、田烏谷及です。ついにきたのです。

子供達はもちろんの事、職員も楽しみにしていた、臨海学舎の始まりです。昨年にひき続き、二泊三日の日程がくまれています。

第一日目はかろうじて、薄日の射している空の下で、つかり始めた頃、誰もが予測していなかった雨がポツリ、ポツリ、夕立が来たのです。

私達を真っ先に、歓迎してくれたのは雨、雨、雨。そして雷。

水の冷たさと塩っ辛さを知った直後のハプニング、子供も職員も急ぎ足の帰宿となりました。

風邪でもひかれては大変――と、大急ぎの着がえ。寒さにふるえる子、疲れた様子がみえる子、まだ泳ぎたそうな子――さまざまな思いの中で、夕食までの時間を過ごすことになりました。

時おり光射す窓辺で海をながめたり、好きな姿勢で、歌をくちずさんだり、ゲームをしたり、昼寝の続きを楽しんだり。

慣れない食器（陶器）での夕食割り箸を割らずに食べていたり――なかなか楽しい食事風景。食欲もあり元気でした。

そんな緊張の一日を終えて、新しい朝をむかえる事となりました。

今にもなき出しそうな空とにらめっこ。

「泳げへんのか。」

「いつ泳ぐんや。」

そんな言葉に、いい返答が出来ない夏空を恨むばかり。

二日目の午前中は、各棟別の動き。トランシーバーで、連絡しあう男子職員。散歩に出かけ、日本海の荒々しい景色をながめたりしながら、時間を過しました。

午後から、待望の水泳。空に願いをこめて、第二回目の水泳が始まった。少し波立つ中で、二班に分かれての動き。休憩と入水（泳）

まず一班（泳げる組）が泳ぎ出す。

「ウゥー　冷たーい」

「さむーい。」――口々にとびだす。それでもしばらくするとなんのその。本格的に泳ぎ出す。顔をつけ。バタ足で前へ、前へ、水を得た魚のごとくに。

交代の時間です。二班（水遊び組）何名かのグループごとに、波打ち際でつかる。

キャーキャー騒ぎ出す。海から飛び出す子、恐る恐る入っていく子。「せっかく海にきたんや、しっかり入ってこい。」とかけ声。

やっと慣れた頃、またしても、きまぐれ空に降られてしまう。水泳即中止。残念そのもの。昨日と同じ。二日も続くとうんざりで、降ったりやんだりの、僅かな晴れ間をぬって、浜辺を散歩するクラスも。気楽な、自由時間。テレビもラジオもない。好きな事をしていい時。夕食はまだまだである。

そうして、二日目の夜も暮れていく。水平線に沈んでいく太陽の美しさを見ることもできずに。

楽しみにしていた花火やキャンプファイヤーも、踊りさえも、雨でだめになってしまったのです。

最終日の朝は、なんとか晴れ間がみえている。

「先生、ええ天気やわ。」と、元気な声。

全く泳ぎに参加できない子供達（第三班）は、ボートに乗せてもらって海を直接感じる。

すいかとジュースのおやつ。

そして、また泳ぐ。プールの圧迫感もなく、のびのびと手足をのばして泳ぐ、泳ぐ。三日間の総仕上げ。二班も海水と戯れる。

誰もが、未練残しての帰りじたく。陽焼けした肌をおみやげにしたかった――ひとりひとりの子供、職員の胸に、僅かづつの思い出を秘めて、いざ、落穂寮へと――。

（森田）